

平成24年、新年最初となるメルマガ noichi 第八号は、本年の干支『龍』です。

龍は伝説上の生き物であるとはいえ、古くから敬われてきた神獸として息長く人間界に留まり、その姿を見ることはなくとも、心の中に『実在』することを疑う者はありません。

本号は、法政大学教授のステイヴン・ネルソン博士、(有)ネオ企画代表の麻井紅仁子氏の御協力を賜り、他いつものメンバーでお届け申し上げます。

新年明けましておめでとうございます。

今年の十二支は『辰』。辰と聞いて連想するのは本年が『閏年』であること、閏年と聞いて連想するのは本年が『五輪』の開催年であること。尤も今では夏と冬が二年おきになったので、今日では余りパツとしない関連付けなのかもしれませんが。

昨年はニュージーランドの大地震、三月の東日本沿岸の大地震、タイの洪水といった史上最悪レベルの災害、世界情勢ではムバラク政権の退陣、カダフィー独裁制の崩壊、アメリカ軍がイラクから完全撤退、暮れには金正日総書記の死去といった転換期を迎えて、局面変わつての西暦2012年、その真価が問われる一年といえそうです。

本年は世界平和、自然災害からの復興、五輪をはじめとする世界規模での人間の結束と愛に恵まれ、平成24年『辰』の年が素晴らしき一年となりますよう、心から祈念して止みません。

ところで、新年明けた先の元旦お昼過ぎ頃だったでしょうか、関東を中心に割合と大きな地震が起こりました。不謹慎な表現になるかもしれませんが、その時私の脳裏に、大きな龍が、地底で12年の眠りから目覚める錯覚がありました。龍というのは、古来から信じられている神の象徴、その化身です。西洋の神話や、昨今のアニメの世界では強き悪獣として登場することもしばしばですが、周知の通り、箒が龍そのものとして崇められている様に、本来は敬うべき存在です。ただ、龍は、怒らせると怖い。『逆鱗に触れる』の語源は、龍の首にある一つだけ逆きになった鱗に触れると眠れる龍が逆上して必ず殺しにかかる、という伝説なのだとか。

温厚な龍を怒らせずに、昇龍の背中に乗って天空を舞っていたいのは、各々の節なる願いでありましょうか。メルマガ noichi 新年一回目は、縁起良く『龍』のテーマではじめます。本年も宜しくお願い申し上げます。

法政大学教授 スティーヴン・G・ネルソン

新年、おめでとつございます。「年立ち返る」時、干支も変わる。十二支でいうと今回は「卯」から「辰」へ、対応する動物を表す漢字でいうと「兔」から「龍」へ。「龍」は「竜」とも書くが、意外なことに「竜」の方が古く、威厳をもたらすためにそれを複雑にしたのが「龍」だそう。もう一つ意外なことに「龍」でも「竜」でも「リュウ」という音読みはいわゆる呉音で、正式とされる漢音は「リョウ」だ。でもそう考えれば京都の龍安寺が「リョウアンジ」と読まれるのは頷ける。

十二支の動物たちを眺めるといつも残念に思うのは私の好きな猫が入っていないことだ。逆に龍という想像上の動物が入っている。想像上にしてはその姿はずいふんと細かく規定されているようだ。「体は大蛇に似ていて、背に八十

一枚の鱗、四足に各五本の指、頭には二本の角があり、顔は長く耳があり、口辺に長いひげをもつ」と物の本に書いてある。人間の想像力というのは創造的だ。

十二支の「辰」はもちろん「リュウ」でも「リョウ」でもなく、音読み「シン」、訓読み「たつ」だ。「龍」も「竜」も「たつ」と訓読される。外国人の私にとって不思議なのは、想像上の動物でも訓読みがあることだ。総じていえば訓読みはたいして中国からの影響が入る前からすでに日本にあったものを指す場合が多い。楽器でいうと「ふえ」「こと」「つづみ」「すず」などがそうで、中国伝来の「笙」や「箏」、琵琶などは訓読みがない。それでは、動物として「たつ」も日本に存在していたのか。存在そのものは「極めて疑わしい」と考えてもよさそうだが、実際、「辰」「龍」「竜」を「たつ」と読むようになった理由については定説がないらしい。

ここで駄洒落のようにお思いかもされないが、一つの考え方を提示してみよう。指先でいいので、「龍」でも「竜」でも書いてみて下さい。最初に書くのは？ そう、「たつ」なのだ。まんざら嘘でもないのでは？

## 龍の年があけた

(有) ネオ企画代表 麻井紅仁子

十二支のなかで、唯一空想の動物でありながら、ひときわ存在感がある『龍(辰)』の新年が羨なくあげた。

「龍について、何か書いてくださいませんか？ 何でも良いんです。龍を見ただも」

雅楽之一さんからの、突然の

電話に驚き

「まさかあ見たことはありませんよ。感じたことはございますけど」

と、私はなんともんちんかなお返事をしてしまったのである。

確かに私は、龍には一方ならぬ思い入れがある。二十年ほど昔のことになるが、私の住む金沢の奥座敷霊峰医王山いおうぜんに伝承される龍神伝説を素材にした邦楽劇『双龍月光の舞』を企画したことが機縁となり、幕末の琴師の無縁墓と遭遇し、その幻影を追い求めるなかで、今も生涯の師と仰ぐ久保田敏子先生との出逢いをいただいた。

龍神さまからのご褒美かと思えるこの大きな出逢いをきっかけに、多くの方々のご縁を結ばせていただけ、皆様のご助力のおかげで箏という素敵な楽器、音楽の魅力をもっと多くの人たちに知って欲しいという願いから始めた活動は今も道半ばながら続いている。

龍は私にとって神なのかも知れない。

そして昨年、私は又、「みだれ」を演奏する祖父と孫息子の舞台を拝聴した。唯是震一師と、雅楽之一さんによるものである。

老熟した音色で、骨太く縦横無尽に独自の世界を繰り広げる大龍に、身をゆだねるように柔軟に絡み合う繊細で優しく透明な若い音色が心にしみて目を閉じたその脳裏に、たしかに箏の『龍』を感じたようで、胸が熱くなったのも記憶に新しい。

西暦を十二で割り、八があまる年が「辰年」と聞く。末広につながるこの数字のように箏曲界の今年が、昇龍の吉兆年になることを信じて、今年もまた、遅くとも一歩ずつ踏みしめて生きてゆきたいと、年頭にあたり改めて誓っている自分がいる。

龍は私にとって神、ということをかたく信しながら。





## TNBのそれっぽい話6

三味線演奏家 (<http://ameblo.jp/nb-zz/>) 田辺 明

日常生活において何の気なしに聞こえてくる音や音楽に気を留めてみると、音楽的・楽典的にさまざまな発見があったり(なかつたり)します。

将棋の駒に「飛車」「角」という駒があります。将棋のルールで、相手陣地に自駒が入るとその駒が「成る」、いわゆるパワーアップをします。一マス前進しかできない「歩」も成ることによって「と金」という有用な駒に変身します。この飛車・角という駒は成ると「竜王(通称:竜)」「竜馬(通称:馬)」という駒にパワーアップします。

日本将棋連盟のタイトルに七冠というのがあります。竜王・名人・王位・王座・棋王・王将・棋聖。七冠の中で最も格上なのが竜王だと言われています。

小学生の頃、将棋に没頭していた時は「パチッ」という駒音が好きでした。テレビのNHK将棋トーナメントの荘厳なオープニングを聴いては日曜日を感じていました。今では有名棋士の羽生善治氏が、当時19歳という若さで竜王の座に就いた時期でもありました。小学校の卒業文集には「プロ棋士になる」ということを書いたほど影響を受けていました。

あれから二十年経ち、「トン」「テン」というバチ音をたて、



龍になぞらえた名称を持つ箏を弾くことになり、人生何があるかわからないなあ、という気持ちになりました。一歩ずつ前進し、竜王になれるように精進したいと思う心は今も変わりません。

### 「第5回牧野由多可賞作曲コンクール本選」

日時・2012年1月29日(日) 14時開演(13時半開場) (入場無料)  
会場・紀尾井ホール 千代田区紀尾井町6-15  
(JR・東京メトロ「四ツ谷」麹町口徒歩6分)  
<http://opus.jp/sys/T121P0421020031>  
問合せ先・牧野由多可の会 TEL・FAX 03-3669-5828  
◆第一次審査通過作品  
坂田拓也 作曲 九段今様  
田辺明 作曲 箏・三絃二重奏曲「阿修羅」  
吉岡愛梨 作曲 〈尺八と三絃の為の〉〜夢見草

### ◎編集部のおみやぎ◎

皆様はじめまして、メルマガnoichi編集部の新見雅晃と申します。いつもメルマガnoichi公式Twitter上ではお世話になっております。今回私が登場したのは、今年、私が高年男だからです！ 人生二回目の年男を迎えています。昭和最後の二月、昭和六十三年(一九八八)年二月の生まれの現在23歳。一回目の年男は、全くと言っていいほど無意識に過ぎましたので、まともに意識するのは今回が初めてでしょうか。今年辰年。十二支の中で唯一空想の生き物。辰とは、今回のテーマでもある龍(竜)にあたります。余談ですが、箏も竜がモデルとなっています。弾く方が竜頭(りゅうづつ)ですが、様々な面において、昇り竜のごとくますます成長していきける一年にしたいと思えます。また、今回で当メルマガも第八号となります。今後とも皆様に愛されるメルマガにすべく、この一年を登竜門として臨んでまいります。

本年もよろしく願っています。

(<http://ameblo.jp/no222m/>) 新見雅晃

邦楽英単語講座・その七：間(ま)

pause



Translated by noriko morikawa  
Illustration : urara okuda

### ◎あとがき◎

中国では昔から恐竜の化石が頻繁に見つかっていたようです。近年になって、英語の論文として海外で紹介されるようになり、古生物学史を塗り替えるような新発見が相次いでいる。代表的なものは羽毛の生えた恐竜の化石。土の粒子が細かいため、羽毛まで化石となって残るのが中国の化石の特徴だ。その結果、恐竜は滅びたのではなく、一部は鳥に進化したという事になっている。

古代の中国でも、恐竜の化石を見つけた人がいたに違いない(今でもその一部は竜骨という漢方として売られている)。発見した人は、まさか一億年も前の生き物だとは思わなかっただろう。こんな生き物があるのかと驚いて、竜と名付けられたでしょう。伝わっていくうちに伝説となり、今の形になったと考えられないだろうか。だとしたら龍は想像上の生き物ではなくなる。それだけではない。龍の末裔は鳥となって、今でも世界の空を飛び交っているのだ。

グラフィックデザイナー (<http://www.1938.jp>) みやはらたかお

